海外レポート

ジョグジャカルタでの研究報告と視察
―― マンガ文化とその受容 ――

石川　優

1. はじめに

2017 年 2 月 22 日（水），インドネシア・ジョグジャカルタのガジャマダ大学（Gadjah Mada University）で開催された第 15 回都市研究フォーラムに参加した。ガジャマダ大学はジャワ島中部に位置する，インドネシアで最も古い国立大学である。本稿では，フォーラムの様子とジョグジャカルタ市街の視察について，筆者の専門であるマンガ文化研究の観点から報告する。

2. フォーラムへの参加―LGBT と「やおい」―

都市研究フォーラムは，本学都市研究プラザとガジャマダ大学が主催する年次集会である。第 15 回となる今回は，主催者である中川眞（大阪市立大学）らの挨拶の他，山田創平（京都精華大学），P. Gogor Bangsa（インドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校），Farabi Fakih（ガジャマダ大学），藤田淳志（愛知学院大学），Rahmawan Jatmiko（ガジャマダ大学），石川優（大阪市立大学），Kurniawan Adi Saputra（インドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校）が報告をおこなった（敬称略，登壇順）[1]。

フォーラムでは “Urban Resilience: Voicing ‘Others’ through Art and Culture” という全体テーマのもと，都市と文化に関するさまざまな報告を聞いた。特に，中心的なトピックとなったのは LGBT（レズビアン，ゲイ，バイセクシュアル，トランスジェンダー）である。日本，インドネシア，アメリカにおける LGBT とアート，LGBT のメディア表象などに関する報告があり，質疑応答やディスカッションが活発に展開された。

インドネシアは人口の 87.21%がイスラム教徒であり[2]，ジェンダーとセクシュアリティをめぐる人々の意識は，しばしばイスラム教の規範と密接に結びつく。例えば，2013 年の調査では「同性愛は社会的に受け入れるべきではない」との回答が 93%にのぼり[3]，近年では保守系のイスラム教団体を中心に LGBT への圧力が強まっている[4]。こうした厳しい社会状況を踏まえると，フォーラムで LGBT を語ることの意義はことさらに大きいといえよう。「私たちは，このようなテーマでディスカッションする機会がほとんどない。非常に勇気づけられる」という参加者の言葉が印象に残った。

筆者は “The Openness of Narrative Creation in Fan Cultures: Based on *Yaoi* in Contemporary Japan” という題目で，日本で制作される「やおい」のマンガ同人誌における表現技法の成立とその共有について報告した（写真 1）。ここでいう「やおい」とは，既存作品の男性キャラクター同士の関係性（友人やライバルなど）に恋愛要素を読み込んで物語を再編する「二次創作」の一種を指し，女性を主な担い手とする。一般に，「やおい」は「女性による男性同士の物語の創作と受容」という点が強調され，ジェンダーやセクシュアリティと関連づけて論じられることが多い。しかし，今回の報告では「やおい」の表現技法という側面に着目し，女性たちの創作の広がりがどのような表現規則によって支えられているかを考察した。報告に対する質疑応答では，「やおい」と他のジャンル（特に，「百合」と呼ばれる女性同士の関係性を描く物語）との比較や LGBT と「やおい」のコミュニティ間の関わりなど，多岐にわたる質問やコメントが寄せられた。

フォーラムへの参加を通じて，社会規範のもとで周縁化される表現について，改めて考えさせられた。例えば，現在「やおい」は世界各地で人気を集めており，インドネシアにも一定数の支持者がいると推測される[5]。しかし，イスラム教が根づくインドネシア社会では同性愛表現や性表現に対する規制が厳しく，「やおい」の流通経路は日本よりも遥かに限られている[6]。フォーラムで知り合ったガジャマダ大学の学生によると，「やおい」はコンベンションや SNS を介して内密にやりとりされているようである。社会がもつコンテクストと，その中で表現がもち得る可能性について思いを巡らせる一日となった。

写真 1. 第 15 回都市研究フォーラムでの報告

3. 市街の視察―マンガ／コミックスの出版状況―

ジョグジャカルタでは，市街の視察をとおしてインドネシアにおけるマンガ／コミックス文化の様態を垣間見る機会を得た。例えば，キャンパスの近くに位置するグラメディア（Gramedia）は，現地の大型チェーン書店である。書籍だけでなく，電化製品や日用品，文房具などが複数のフロアで販売され，日本でも見慣れたキャラクターをあしらった製品が並んでいた。

その中でも，筆者の目を引いたのが日本マンガの翻訳出版である（写真 2）。1990 年代以降，日本マンガはインドネシアの若い世代を中心に定着し，現在では市場の大半を占めている。書店を案内してくれた学生から「人気のタイトルは日本とほぼ同じだろう」との話を聞き，マンガ文化のグローバル化を実感した。

写真 2. 日本マンガの翻訳出版

もちろん，インドネシアで読まれるのは日本マンガだけではない。書店では，中国語圏の漫画（Manhua），韓国の漫画（Manhwa），欧米のコミックスの翻訳出版などの他，インドネシア出身／在住作家によるコミックスが販売されていた。フェブリアニ・シホンビングによると，インドネシアでは，このように多様なマンガ／コミックスは「日本マンガ」，「ヨーロッパ・コミックス」，「北米コミックス」という具合に，様式（Gaya）に基づいて分類されているという[7]。ここでいう様式とは，各地のマンガ／コミックスに特徴的な表現スタイルを指す。例えば，不規則なコマ割や大きな瞳をもつキャラクター造形などは「日本マンガに特有の様式」とみなされる。こうした分類方法は，マンガやコミックスの表現を特定の国・地域との結びつきから様式化するものといえる[8]。

また，近年，現地では，海外のマンガ／コミックスが市場を占有する状況に対して，インドネシア・コミックスを活性化させようとする動きが広がっている。ジョグジャカルタで入手したいくつかの雑誌や単行本は，インドネシア出身／在住作家によって制作されたものである。興味深い点は，それぞれの作品における表現様式の選択性である[9]。例えば，*Kosmik Mook* というコンピレーションには，日本マンガのように変則的で多層的なコマ割のものや，アメリカのグラフィック・ノベルを彷彿とさせる画風のものなど，さまざまな様式で描かれたコミックスが掲載されている[10]。インドネシア・コミックスの活性化が，他の国・地域で培われた（とみなされる）様式によって促進されるとすれば，インドネシアにおけるコミックス表現が今後どのようにハイブリッド化していくのか，目が離せない。

さらに，*Kosmik Mook* に見られる表現様式の選択性は，「日本マンガのようなコマ割」，「アメリカのグラフィック・ノベルを彷彿とさせる画風」といった言い回しに含まれる問題をも浮彫りにする。こうした作品群は，そもそもマンガ（あるいはグラフィック・ノベル）的な様式とは何なのか，表現は日本やアメリカなどの特定の国・地域に固有のものなのか，という問いを私たちに投げかけているのである。ジョグジャカルタの視察は，グローバルな環境における文化の伝播性について見つめ直す機会を与えてくれた。

4. おわりに

ジョグジャカルタを訪れた時期は雨季にあたり，晴天とスコールが交互にやってくるような気候だった。熱帯の空気に包まれながら，地域に息づく文化，海を越えて往還する文化，それらが混ざり合うことで生まれる文化について，さまざまな発見があった。筆者にとって，海外で研究活動をおこなうことの意義のひとつは，たくさんの「気づき」が得られる点にある。この経験を今後の研究にも活かしていきたい。また，行き届いた気配りでジョグジャカルタの滞在を支えてくれたガジャマダ大学のスタッフに，心より感謝する。

注

1．登壇者の所属表記は，2017 年 2 月時点のものである。フォーラムの概要は，以下を参照。http://urp.fib.ugm.ac.id/news/14#（最終閲覧 2017 年 8 月 20 日）

2．外務省「インドネシア共和国基礎データ」http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html（最終閲覧 2017 年 8 月 20 日）

3．The Pew Research Center, *The Global Divide on Homosexuality: Greater Acceptance in More Secular and Affluent Countries*. Washington, DC: The Pew Research Center, 2013. http://assets.pewresearch.org/wp-content/uploads/sites/2/2014/05/Pew-Global-Attitudes-Homosexuality-Report-REVISED-MAY-27-2014.pdf (last accessed 20 August 2017)

4．例えば，以下の報道を参照。BBC News, “The Sudden Intensity of Indonesia’s Anti-Gay Onslaught” in *BBC*, 29 February 2016. http://www.bbc.com/news/world-asia-35657114（last accessed 20 August 2017）

5．インドネシアにおける「やおい」の受容については，以下を参照。Yamila Abraham, “Boys’ Love Thrives in Conservative Indonesia,” in *Boys’ Love Manga: Essays on the Sexual Ambiguity and Cross-Cultural Fandom of the Genre*. Eds. Antonia Levi, Mark McHarry and Dru Pagliassotti. Jefferson, NC: McFarland, 2008, 44-55.

6．日本では，「やおい」は同人誌即売会，インターネット，専門書店での頒布の他，一部は一般書店で販売される。

7．フェブリアニ・シホンビング「コミックを「政治化」する「影響」論と「様式」論―インドネシアのコミック言説について―」石川優訳，ジャクリーヌ・ベルント編『国際マンガ研究』第 4 号，京都精華大学国際マンガ研究センター，2014 年，59-84 頁。http://imrc.jp/images/upload/lecture/data/04_Febriani.pdf（最終閲覧　2017 年 8 月 20 日）

8．シホンビングは，この区分には占領と独立をめぐるインドネシアの歴史が関わっていると指摘する。同書，67-68 頁。

9．出版社によっては，特定の様式に統一する（または特定の様式を禁止する）場合もある。以下を参照。Febriani Sihombing, “Blurring the Boundaries of Comics Classification in Indonesia through *Wanara*” in *Kyoto Review of Southeast Asia*, vol. 16, 2014. https://kyotoreview.org/issue-16/blurring-the-boundaries-of-comics-classification-in-indonesia-through-wanara/（last accessed 20 August 2017）

10. *Kosmik Mook*, vol. 12, Jakarta: Gramedia, 2016.